

## 第IV群 座長のまとめ

鹿児島大 耳鼻咽喉科

大 山 勝

本セッションは、鼻局所に対する温熱エアロゾル療法に関するものであった。

蒸留水を43℃のエアロゾルとして鼻腔粘膜に噴霧し、鼻アレルギーや感冒初期の鼻炎に卓効が得られるということで、フランスとイスラエルで基礎、臨床の試験が行われたのに始まる。本邦においても、多施設共同で、43℃エアロゾル発生機器と32℃エアロゾル発生機器を用いた二重盲検比較試験が鼻アレルギーと感冒時の鼻炎症例で行われ、有意差をもって、温熱効果のみられることが立証されている。

萩野他の阪大グループは、28施設で通年性鼻アレルギー101名について、局所温熱療法（リノセルム装置使用）を試み、極めて有用15.8%、有用39.6%、やや有用19.9%、有用以上で55.4%と高い効果のみられることを報告した。その中で、鼻閉型およびくしゃみ鼻閉型が46.7%、77.8%と従来の薬物療法に比して、極めて高い治療効果のみられることが注目された。

これに関して、大越（東邦大）は、鼻閉の効果の発現時期および小児での効果について質問し、小児症例の場合、早期に鼻閉の改善されるものと、そうでないものがあることが討議を通じて明らかにされた。鼻閉の効果が、温熱を介した自律神経系の関与とも密接に連撃していることを示唆する問題でもある。

また、山口他（慈恵医大）は、同様に関連25施設を中心に、本療法の通年性鼻アレルギーへの適用時の至適使用時間、頻度などについて詳細に検討した。これまで、リノセルム療法は、欧米の試験にならって、30分週1回として行われていたが、その臨床的意義については、多少の疑問も残されていた。この問題について、至適使用時間は10～15分でも良く、かつ有効率は週2～3回、4週間のものが50%で最も良好なことなどが示された。実地臨床医にとって、極めて貴重な成績を提供しているものと思う。また、橋本他（東北大）は、通年性鼻アレルギー症例に対する局所温熱療法の結果、著効、有効を合わせて64.6%という高い成績のみられることを報告した。しかも、鼻アレルギーの3主徴であるくしゃみ発作、鼻汁、鼻閉のいずれにおいても60%以上の有効性のみられることを示し、聴衆の注目をひいた。

以上のごとく、鼻アレルギーに対する薬物療法、減感作療法、手術に加えて新しい物理療法が登場し、その効果や有用性が多くの施設で検討されたことは、本疾患の治療に一つの曙光を見出すものとして特筆に値する。

また、従来のリノセルム装置に代って、わが国で設計し開発されたサーモライザーもすでに供用される段階となった。今後の日常臨床での試用とその効用について討議を通じて、耳鼻咽喉科臨床での新しい療法に育て上げればと念じている。